

冶楽会原稿

岩尾洋

年末になると会誌の原稿に何を書こうかと考えるようになりました。退職して満員電車に乗らなくなり、講義の準備や会議の準備もなくなり、研究からも遠く離れてボーと生きてる時間が多くなったからだと思います。

最近になり自分の身の回り品の断捨離の重要性がようやく実感として分かり始めてきました。私事ですが、母が98歳で健在ですが、さすがに最近はやや認知機能が低下して日常生活にも少しの介助が必要になりましたので住宅型有料老人ホームに入りました。そこで、母が過ごしていた部屋を兄弟で整理することになりました。我々兄弟が母から聞いていない事柄が意外と多く、知らない物が大量に出てきて戸惑っています。身近に居て頻回に会っているにもかかわらず、思っていたよりコミュニケーション不足であったことが分かりました。

不要になった家具、生活用品、寝具、台所用品、着物や洋服、趣味の物、本や紙類、写真などなどです。写真を処分するのは非常に時間のかかる代物です。親の世代の非常に古い写真から始まり、兄弟の生まれた時から、幼稚園、小学校、中学校、大学、そして結婚、さらには自分たちの子供の誕生から成長へと、膨大な量の写真が出てきます。それぞれ思い出がある写真が多く、一枚一枚見ていくと思い出がよみがえりバツサリと捨てることを逡巡してしまいます。自分が持っているはずの写真も多くあるはずなのですが、今まで手持ちの写真ですらほとんど見直すことがなかった写真たちです。膨大な数の中からどれを残して置こうかと思案にくれます。もう一つの難題は、写真を撮った日時が分からないものが多いことです。特にバラで出てくる写真たちは、おおよその見当を付けて整理するしかありません。アルバムに貼られた古い写真は、はがすときに破損することがあり手こずります。これはと思えるわずかな写真を残すことにしようかと考えています。思い返してみると過去の写真を見返すなんてことはほとんどしてこなかったことに気が付きます。

自分の過去を振り返ると、仕事場を何度か引越してきました。高松から大阪へ引っ越した時、あわただしく必要と思えるものを二十個前後の段ボール箱に詰めたと思います。その中で実際に開けて使用した箱の数を正確には覚えておりませんが、開封すらしなかった箱が5個以上あったと思います。仕事の内容が変わり、環境が変わることにより必要と思われた書類や物が不要になった結果です。次は、退職して四天王寺大学へ移った時です。やはり二十個前後の段ボール箱に詰めたと思いますが、前回の経験が生かせず、開封しなかった箱が5箱以上ありました。上手に断捨離をすることはとても難しいように感じます。

薬理学会のこと

冨 田 修 平

冷楽会の皆さまにおかれましては、お変わりなくお過ごしでしょうか。師走に入り、寒さも例年通りになって参りました。まずは、お身体をご自愛されますよう、皆さまのご健康をお祈り申し上げます。今年も無事に冷楽会懇親会で皆さまにお目にかかる機会を持つことができました。また、今月は先代より引き継いでいる超願寺での動物供養や忘年会なども予定されています。教室 OB の皆さまも是非ご参加下さい。

さて、今年は学会出張も増えましたが、なかでも薬理学会の北部会や西南部会など他の部会にも参加する機会がありました。プログラム内容は各部会によって少しずつ異なり、ポスター発表・討論に加え、各教室の紹介や新任 PI の紹介などのセッションに多くの時間を割いている部会もありました。一方、普段私たちが参加する近畿部会は、全て口頭発表のセッションで構成され、若手研究者に口頭発表と YIA 応募の機会を多く作ることで部会の活性化を進めてきたことが特徴です。一般口演の質疑応答はどの部会も活発な様子で見受けられますが、近畿部会での時折見かける若手発表者への教育的な質問や助言はとても好感の持てるものです。来年度の秋に開催される予定の 148 回近畿部会では部会長を担当させていただくことになりましたが、近畿部会

らしい良さを更に引き出せるように学会発展に尽力したいと思っています。過去の当教室の開催記録を確認すると、1955年に上田重郎先生が第10回開催、1976年に山本研二郎先生が第50回開催、そして、2001年秋開催の第100回近畿部会では、岩尾洋先生が部会長、そして三浦克之先生が事務局長をご担当されております。教室に残されている資料によると、第100回開催では、当時新設された医学部学舎4階および6階の講義室や18階の会議室などを使用し、当時のことに喫煙コーナーも設置されており、懇親会は天王寺駅前の都ホテルで行われたようです。また、参加者は200名から250名を見越して準備されていたようです。近年の参加動向を鑑みると今回の開催規模は若干小さくなると思われますが、少しでも多くの会員に参加していただけるよう取り組みたいと思います。

一方、今年度の第98回薬理学会年会は幕張メッセで開催され、日本解剖学会および日本生理学との合同開催です。過去に解剖学会との合同開催はありませんでしたが、それぞれの学問領域の特徴をワンヘルスとして捉え新しい研究領域の創生を目指すことをサブテーマとして開催されるようです。昭和2年に設立された薬理学会も、再来年には第100回目の年会開催となります。これまでの先人の先生方が創り上げた薬理学会の歴史とこれからの薬理学の在り方を考える節目となる年会になるのではないかと思います。

皆さまにおかれましてはよいお年をお迎えくださるようお祈り申し上げます。

ケニア共和国の滞在記

岡 真優子

2024 年 1 月 22 日の午後、ケニア共和国ナイロビ市にあるジョモ・ケニヤッタ国際空港に降り立った。2010 年に初めて訪れてから 6 度目にもなると、蒸せるような空気も入国審査所の向こうに見える光景も懐かしくて、思わず戻ってきたなと感じていた。携帯電話の SIM カードを購入し、空港まで迎えにきてくれたドライバーさんと長崎大学熱帯医学研究所ナイロビ拠点へ向かった。私はこの拠点の一員として過ごしたことはないけれど、迷うことなく建物へ入りお久しぶりですと数名のスタッフに挨拶した。足かけ 15 年、国内の移動や宿泊でサポートをしてくださるスタッフの方々には言い尽くせないほど感謝している。これまでの 5 回の調査研究では、5 人以上のメンバーをチームリーダーがとりまとめてくれていたが、今回は 2 人だけだった。ケニアで修士号を取得した相方は、同い年の女性で、スワヒリ語で現地の人々と楽しく会話ができる。一方、英語でのコミュニケーションがやっとな私は、彼女のことを頼もしいスーパーウーマンと信じて今回の研究に臨んだ。しかし、共同生活を開始してあっという間に彼女に抱いていた輝きが少し違うものに替わっていった。

今回の目的地も、飛行機でナイロビからキスムに移動し、そこから車で 4 時間ぐらいのところにあるビクトリア湖畔のビタ地区であった。まず、ケニアで 3 番目に大きい都市のキスムで食料と薬を調達した。1 ヶ月の滞在中は、キッチン付き 2 ベッドルームを一日 700 円で借りることになっていた。スーパーで牛乳、ヨーグルト、パンなどを購入し、日本から持ってきたインスタント食品と共に自炊生活だった。薬は、マラリアや住血吸虫に感染していることがわかった時に配布するためのもので、ケニア国の倫理審査をパスするためにはこうした治療項目が義務づけられている。よ

うやく仮住まいに到着したのはビクトリア湖に夕陽が落ちた時だった。この日から 2 人の同居生活が始まった。

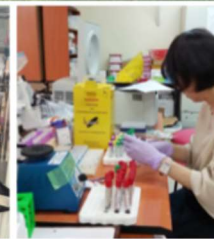
私たちの研究の目的は、ビタ地区の小学生（3-6 年生）を対象とした結核調査で、日本から QuantiFERON 診断キット（結核診断薬）を 350 人分持参した。結核は、病原体の結核菌感染によるが、咳や熱などを伴う活動性結核と無症状の潜在性結核がある。世界では年間 820 万人が新規の活動性結核に罹患し、130 万人が結核で命を失っている（WHO 2023 年）。また、潜在性結核は世界に 20 億人存在するが、これを正確に診断できないのが問題となっている。QuantiFERON による活動性結核の検出感度は 100%なのに対して、潜在性結核は 40-60%と低く、免疫機能が未発達な小児にはこの診断法は適応されていない。だから新しい診断法を開発したいと思っている。現地のドクターとナースの協力により、採血、身長、体重、握力などの 10 項目の測定をすることになっていたが、教育省の許可が下りておらず、開始の予定が 1 週間遅れた。振り返れば、この 1 週間はありがたい時間だったと思えてくる。研究が始まると、早朝 5 時半に車で小学校に向かい、身体測定を終えて午後 2 時を過ぎに研究室へ戻ったら、ビスケットと紅茶を少し口にして QuantiFERON 検査を始めるのが日常となった。ケニア人のエバンス君とベナード君が検査方法を習いたいと申し出てくれ、ピペットマンの使い方や ELISA 法を習いながら手伝ってくれたが、実質的な戦力は私 1 人だった。彼らは、寄生虫感染症のフィールド調査を専門とする若手研究者で、実験室での研究をほとんどしたことがない。それにもかかわらず、私を手伝ってくれたのは本当にありがたかった。

現地に入って許可が下りるまでの一週間は、目的を達成して帰国できるのか不安だったが、体力には余裕があったので週末には相方とビクトリア湖畔のリゾート地で楽しい思い出をつくることがで

きた。移動は、ボーダーボーダーと呼ばれるいわゆるバイクで、ケニアではタクシーの代わりに利用される移動手段である。停留所（単に道ばた）に行って目的地までの値段交渉をして、日本でもバイクにのった経験のない私が相方と3人乗りで岩がゴロゴロした舗装のない道を片道1時間走った。美味しいチキンソテー、ポテト、うがり（トウモロコシの粉を練って蒸した主食）を食べ、同じバイクに乗って無事に家に帰った。

350人の結核調査では、8人がQuantiFERON陽性だった。4人に1人が結核菌に感染していると言われているが、この診断法ではやはり小児の結核菌感染は診断できないと考える。陽性者の1名は、事前の問診でprolonged coughとprolonged feverがイエスだったのですぐに病院で検査を受けて活動性結核と診断された。学校からは感謝されたが、ここには体調が悪くても病院に行けない子供達がたくさんいる。その現実には辛かった。2024年2月17日、350人分の血清サンプルと便のDNAと一緒に関西国際空港に帰国した。これまでにない過酷な食環境と研究環境だったので、ケニアに行くことはもうないかなとふと思ったのを覚えている。

2024年にケニアで見たビクトリア湖に沈む夕陽、毎日家に遊びに来たベルギー人の飼い猫、40円で買える大きなアップルマンゴー、ポップコーンの材料のように硬い焼きトウモロコシ。ゴキブリは気にならないと言って退治を私になげた相方は、蚊帳を使わず窓を開けて寝ていたが、私は夜の寒さで風邪を引いた。新鮮な牛乳は殺菌しないといけないからとお鍋で煮沸してすべて固形物にしてしまった相方は、失敗にはくよくよしななおおらかな女性だとわかった。こんな一ヶ月は二度と経験することはないだろうと思いつつ、もう一度行きたい気持ちが心の中にはあるように感じている。



(左) 運動場での身体測定の風景。
 (右上) 週末に訪れたビクトリア
 湖畔のリゾート地。(右下)
 QuantiFERONの反応試験、長崎熱
 帯医学研究所ビタ拠点の実験室の
 風景、焼きトウモロコシ。

第3回あべの薬理学懇話会

2024年8月3日（土）大阪公立大学医学部学舎におきまして、第3回あべの薬理学懇話会（市大フォーラム）を開催いたしました。皆さまのお陰様を持ちまして、御出席者35名、発表演題9題の盛会となりました。酷暑のなか御参加いただきました先生方に御礼申し上げます。

プログラム（敬称略）

（1題20分：発表12分・質疑応答8分）（敬称略）

12:30-12:35 開会宣言

座長：北田研人（香川大学医学部 薬理学）

1. 12:35-12:55 鳥取大学医学部病態解析医学講座 薬理学・薬物療法学教室
澤野達哉
「肥満初期における心房細動に対するCaMKIIの役割」
2. 12:55-13:15 関西医科大学医学部医学科 iPS・幹細胞再生医学講座
藤岡 杏梨菜
「iPS細胞を用いた遺伝性視神経症の病態解明」

座長：今西正樹（徳島大学大学院医歯薬学研究部 薬学域 医薬品機能生化学分野）

3. 13:15-13:35 大阪医科薬科大学大学院医学研究科 創薬医学
森原啓史
「ヒトiPS細胞由来心筋細胞を用いた研究」
4. 13:35-13:55 香川大学医学部 薬理学
AKUMWAMI STEEVE
「Tissue water balance associated with beta-AR-induced cardiac hypertrophy」

座長：清水佐紀（大阪医科薬科大学 薬品作用解析学研究室）

5. 13:55-14:15 三重大学大学院医学系研究科 統合薬理学
弓削 瑞葵
「ゼブラフィッシュを用いたミクログリア動態解析手法の開発」

6. 14:15-14:35 大阪医科薬科大学 薬品作用解析学研究室
日下 綾菜
「Kir4.1 チャネル阻害薬 Quinacrine の抗うつ効果発現におけるアストロサイトの関与」

14:35-15:05 BREAK

座長：松永慎司（大阪公立大学大学院医学研究科 分子病態薬理学）

7. 15:05-15:25 関西医科大学医学部医学科 iPS・幹細胞再生医学講座
浅井 智樹
「iPS 細胞由来 Albumin 産生肝細胞様細胞に対し分岐鎖アミノ酸がもたらす生理機能の活性に関する検討」
8. 15:25-15:45 徳島大学大学院医歯薬学研究部 臨床薬理学分野
新村 貴博
「医療データ解析に基づくスニチニブ誘発心毒性に対する予防薬探索」

座長：富田修平（大阪公立大学大学院医学研究科 分子病態薬理学）

9. 15:45-16:10 徳島大学大学院医歯薬学研究部 薬学域 医薬品機能生化学分野
土屋 浩一郎
「亜硝酸の抗酸化作用」

16:10- 閉会宣言

2024 年 執筆業績

1. Takuya Nishinakagawa (#), Takujiro Homma (#, These two authors contributed equally to this work), Aoi Ikeda, Mai Hazekawa, Yurie Morita, Takehiro Nakagaki, Ryuichiro Atarashi, Noriyuki Nishida, Daisuke Ishibashi. Lysine residues are not required for proteasome-mediated proteolysis of cellular prion protein. Biochem Biophys Res Commun. 2024;735:150807. doi: 10.1016/j.bbrc.2024.150807. PMID: 39413610
2. Tsukasa Osaki, Takujiro Homma, Yuya Soma, Satoshi Miyata, Yumi Matsuda, Junichi Fujii. Ascorbic Acid Deficiency Promotes Metabolic Remodeling and Pulmonary Fibrosis that Leads to Respiratory Failure in Sod1 and Akr1a Double-Knockout Mice. Available at SSRN. doi: org/10.2139/ssrn.4855147
3. 松永 慎司, 富田 修平
『HIF-PH 阻害薬によるがん微小環境と腫瘍免疫への影響』
2024 年 159 巻 3 号 P. 169-172 日本薬理学雑誌

2024 年 学会・研究会発表

- 第 42 回 Cytoprotection 研究会 2024 年 3 月 22 日
フェロトーシスによる臓器障害を保護する新規化合物のスクリーニング
本間拓二郎、川尻柊斗、廣谷碧美、松永慎司、富田修平
- 第 77 回日本酸化ストレス学会 5 月 17-19 日 本間
フェロトーシスによる細胞傷害を保護する新規化合物のスクリーニング
本間拓二郎、川尻柊斗、廣谷碧美、松永慎司、富田修平
- 第 69 回日本透析医学会 6 月 7-9 日
HIF-PH 阻害薬と悪性腫瘍
松永慎司
- 第 150 回日本薬理学会関東部会 2024 年 6 月 29 日
化合物ライブラリーを用いた新規フェロトーシス抑制剤のスクリーニング評価
本間 拓二郎、西村 百合子、松永 慎司、有澤 光弘、富田 修平



Young Investigator Award を受賞しました！おめでとうございます！

フリーラジカルスクール 2024in 岐阜 2024 年 8 月 7-8 日

私が見てきた研究不正—データ不正操作を含む偽論文問題とその対策
本間拓二郎

第 37 回日本酸化ストレス学会関東支部会 2024 年 11 月 15 日

銅依存性細胞死 Cuproptosis からの細胞保護を目指した治療薬探索
本間拓二郎、杉山直弘、杉本篤哉、松永慎司、富田修平

第 15 回スクリーニング学研究会 2024 年 11 月 22 日

銅依存性細胞死 Cuproptosis からの細胞保護を目指した治療薬探索
本間拓二郎、杉山直弘、杉本篤哉、松永慎司、富田修平

第 146 回日本薬理学会近畿部会 2024 年 11 月 30 日

腫瘍内マクロファージの低酸素誘導因子が腫瘍組織環境に及ぼす影響の検討
松永 慎司、平川 遼、本間 拓二郎、富田 修平

第 9 回西日本医学生学術フォーラム 2024 2024 年 12 月 15 日

科学的誠実さを脅かす撤回論文の分析：酸化ストレス分野におけるケーススタディ
杉本 篤哉、杉山直弘、本間拓二郎、松永慎司、富田修平

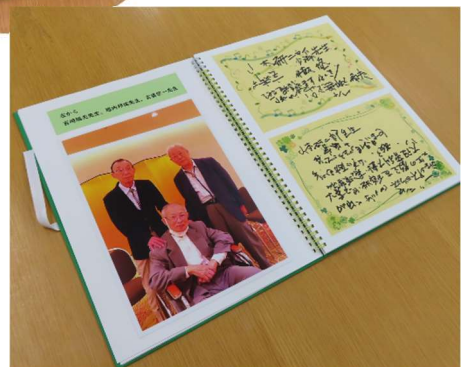
第 34 回日本循環薬理学会 2024 年 12 月 20 日

担癌モデルマウスにおけるプロリン水酸化酵素阻害剤の腫瘍内マクロファージに対する影響
松永 慎司、平川 遼、本間 拓二郎、富田 修平

2024 年今年の出来事

5 月 助教の徳留健太郎先生が大阪大学大学院医学系研究科 統合薬理学（日比野 浩研究室）に異動されました。新天地でのますますのご活躍を祈念しております。

6 月 冷楽会を都シティ大阪天王寺で開催しました。小雨のなか、ご参加いただいた皆様 どうもありがとうございました。
当日ご記入いただいた山本研二郎先生へのメッセージは無事に先生のお手元に届けられました。





8月 第3回あべの薬理学懇話会（市大フォーラム）を9教室参加のもと開催いたしました。ご参加いただきました先生方に感謝申し上げます。



12月 超願寺にて実験動物の供養を行いました。毎年お世話になっております。



大学統合に伴い、ホームページも新しくなりました。
治楽会の写真なども掲載しております。今後も内容の充実を図ってまいりますので、アドバイスをいただければ幸甚でございます。

URL : <https://cms-admin.omu.ac.jp/med/dept-pharmacology/>

治楽会のページに入るパスワードは下記の通りです。

ユーザーID : gr-med-yakuri@omu.ac.jp

パスワード : yakuri-omu1949

※ご意見、ご感想、ご連絡先の変更等がございましたら、下記連絡先までお知らせください。

MAIL: gr-med-yakuri@omu.ac.jp

編集後記

今年も会誌発行の時期がやってまいりました。毎年 作成を始めるのは秋頃ですが、光陰矢の如し、気が付けば年越しの時期になっているんだろなあ…と考えていたのも10月の話。あっという間に12月になってしまいました。今年も天王寺のてんしばではクリスマスマーケットが行われているようです。会誌の発送を終えほっとしたいま、しばし てんしばでクリスマスを満喫してまいります！

さて今回もご協力いただきました先生方のお陰様で、会誌を無事発行する事が出来ました。この場をお借りして御礼申し上げます。
皆様が良いお年を迎えることができますよう、心からお祈りいたします。

分子病態薬理学教室 秘書 都 志由架